〔学部等研究教育補助金報告〕

山田 守 建築ドキュメンタリー制作プロジェクト

大学キャンパス創成期と建築意匠のルーツを探る

瀧 健太郎

1.プロジェクトの概要
2.プロジェクトの過程
3.プロジェクトの結果と考察



キャンパスの建築を撮影する学生たち

1. プロジェクトの概要

１－１　プロジェクトの概要

「山田 守 建築ドキュメンタリー制作プロジェクト」は、教養学部芸術学科のプロジェクト研究として、指導教官に瀧 健太郎、副指導教官に檜垣 智成 氏を置き、2024 年度秋学期に試験的に開始し、2025 年度春学期に本格的に始動した。本プロジェクト研究は、東海大学・湘南キャンパスのシンボル的存在である 1 号館とその建築家である山田 守に注目し、彼の功績と建築作品に関するドキュメンタリー映像を制作することであった。計画では建築作品の動画記録、関係者のインタビューを交え山田 守建築の魅力を伝えることを目的とした。あわせて、学生が学ぶ大学キャンパスが潜在的に持つ環境や歴史の魅力を掘り起こし、それを可視化する過程において、創作や表現に関する新たな知見や発見を得ることを目指した。研究の予定として、ドキュメンタリー制作にむけた山田 守による建築意匠とキャンパス・デザインのリサーチ、それらの動画撮影、編集作業、タイトルデザイン、動画に関わる音響と音楽制作を、学生の学習プロセスと並行して行うこととした。具体的な構成として、1－3 回：建築家・山田 守とその建築のリサーチ、 4－7 回 ：資料収集と撮影、8－9 回：山田 守の研究者・建築史家へのインタビュー、10－14 回：編集作業、後処理、Web 掲載ほかプロモーション・広報活動を設定した。

投稿日 2026 年 1 月 31 日　受理日 2026 年 01 月 31 日
東海大学教養学部芸術学科

１－２　山田 守について

本プロジェクト研究の対象となる山田 守（やまだ・まもる、1894–1966）は、日本の近代建築を代表する建築家の一人であり、モダニズム建築および公共建築の分野において重要な影響を及ぼした人物である。東京中央電信局（1931）、日本武道館（1964）、京都タワー（1964）などの設計で知られ、構造的合理性と造形的ダイナミズムを融合させた建築表現を追求した。山田 守は、本学創始者である松前 重義（1901–1991）と逓信省所属時代に邂逅し、その親交を契機として 1951 年に東海大学建築工学科主任教授に着任した。さらに 1962 年からは湘南キャンパスの全体計画および教育棟の設計を手がけ、現在に至る大学キャンパス形成において重要な役割を果たしている[i]。またモダン建築の保存・継承を目的とする国際的組織 DOCOMOMO の日本組織は、山田 守が手がけた熊本逓信病院（1956）、社会保険横浜中央病院（1960）、日本武道館（1964）などとともに、東海大学湘南キャンパス（1963）を選定している[ii]。建築史的観点からも、近代建築遺産としての観点からも価値の高い建築とキャンパスの中で、学生らは日々の学業および学生生活を送っている。本プロジェクト研究は、若い世代の感性による映像記録と新たな体験の創出を通じて、山田 守建築の系譜と価値を次世代へとつなぐことを目的として企画されたものである。




１号館でのドローン撮影の様子(左)と撮影画像（右）

2. プロジェクトの過程

２－１　証言の撮影

芸術学科の参加学生にとって、建築や意匠に関する専門的知識を体系的に学ぶ機会は多くない。そこで本プロジェクト研究では、山田 守に関する基礎的理解を深めることを目的として、建築史家および山田 守研究者へのインタビューの実施を、2024 年度プロジェクト研究開始の契機とした。協力者を募り、本学建築都市学部建築学科教授の渡邉 研司 氏には、近代建築史における山田 守の位置づけについて講話をいただいた。また、山田 守研究者である大宮司 勝弘 氏には、湘南キャンパス内に現存する山田建築を前に、建築デザインの特徴や、日常的には意識されにくいキャンパスの歴史について解説していただいた。これら両氏の証言を通じて、学生らは貴重な知見を得るとともに、建築を読み解くための基礎的リテラシーを深めることとなった。その後、湘南キャンパスに現存する山田建築（1 号館・2 号館・3 号館）をはじめ、松前会館、日本武道館など、可能な限り山田 守の建築作品の撮影を行い、映像を通じてそのデザイン・スタイルを辿ることを試みた。その結果、2024 年度学期末には、本ドキュメンタリーのタイトルを**『山田 守　世紀を越える建築』**（英題 : *Mamoru Yamada: Architecture Beyond the Centuries*）と定めた。

２－２　プロダクション過程

キャンパス全体を俯瞰的に捉える映像表現を目指し、ドローンによる空撮を企画した。東海大学工学部講師の

新井 啓之氏に依頼したところ快諾を得ることができ、学生の少ない春休み期間中の晴天日を選び、参加学生とともに撮影を実施した。2 日間にわたる撮影では、1 号館から 3 号館を俯瞰する映像に加え、運動場上空からキャンパス全体を一周するショットや、満開の桜が広がる地上視点から高度を上げることで 1 号館が立ち現れる映像など、象徴的なカットを収録することができた。



音楽制作の録音の様子



清水キャンパスでの撮影の様子

参加学生は、それぞれの能力や関心に応じて作業を分担した。書道サークルに所属する学生はタイトルの毛筆題字を担当し、映像効果を得意とする学生はそのムービングロゴを制作した。また、Web やポスター制作を得意とする学生は、記録・資料作成やデザイン関連の作業を担うなど、各自の専門性を生かした協働が進められた。

さらに、ドキュメンタリー映像の音楽制作については、檜垣 智成 氏（教養学部芸術学科准教授）の指導のもと、同氏の研究室に所属する 3・4 年生の学生にサウンドトラックの作曲を依頼した。4 年生の髙松 慶実さんが 1 号館をイメージした主題曲を作曲し、それを基に他の複数の学生がライトモティーフ（音楽の反復主題）として曲調やアレンジを展開し、2 号館・3 号館など各建築に対応する音楽を制作した。作曲作業は 2024 年度春休み期間中に行われ、2025 年度 4 月以降、檜垣氏、瀧、プロジェクト参加者が同席のもと調整を重ね、6 月には DTM 音源を生楽器で演奏・録音する工程を経て、夏季に音楽が完成した。1 号館の三又形状に着想を得た三拍子の採用や、3 号館のスロープを上昇する旋律表現など、山田 守建築の特徴を音楽的に解釈したサウンドが構築された。

その間、撮影作業は 4 年生から 3 年生へと引き継がれ、湘南キャンパスの追加撮影に加え、清水キャンパス周辺における旧第一高等学校解体に関する情報を受け、静岡カレッジオフィスの協力のもと、清水キャンパス校舎、旧第一高等学校、海洋科学博物館・自然史博物館など、山田 守および山田 守建築事務所による建築作品の撮影を行った。プロジェクト研究の限られた回数の中で制作を進めることは容易ではなかったが、他の授業、アルバイト、就職活動などで多忙な学生らの意欲を維持するため、短期的な目標設定を行いながら、映像および音声素材を段階的に蓄積していった。

3. プロジェクトの結果と考察

３－１　学生による映像記録制作

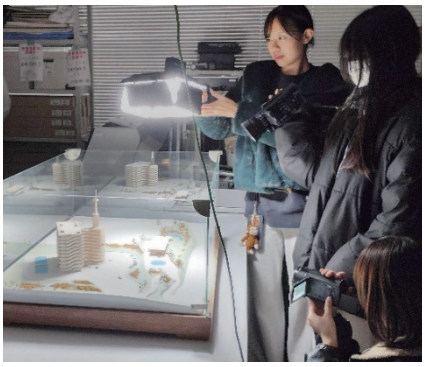
以上のプロセスを経て、本プロジェクト研究では、試験的導入を行った前年秋学期から次年度秋学期にかけて、建築家・山田 守の建築作品、関係者の証言、各種資料の撮影を継続的に行ってきた。本プロジェクトは、学生らにとって、身近な学び舎としてのキャンパスを、普段は意識することの少ないデザインや建築的視点から捉え直す試みとなった。撮影およびリサーチを通じて、山田 守建築の特徴が具体的に理解されるようになった。例えば、キャンパス内に多用されている螺旋型スロープは、山田が病院建築を手がける中で、ストレッチャーによる患者搬送を容易にするために培った設計思想に由来していることが確認された。これらの構造は、結果として大学キャンパスにおけるバリアフリー動線としても機能していると考えられる。また、1960 年代のモータリゼーション

を背景として、3 号館が屋上パーキングを想定して設計されていた点など、教育施設の要請と建築意匠との交点において、さまざまな工夫が施されていることが明らかとなった。

このほかにも、通常は目にすることのできない山田 守がデザインした吊り下げ式装飾照明（1 号館 1 階倉庫内）の記録、ドローン撮影による大学キャンパスの鳥瞰映像、湘南キャンパス建設過程に関する資料、さらには山田 守が手がけた建築模型の撮影などは、芸術学科の学生にとって大きな刺激となった。



松前会館での 2025 年度参加学生



3 号館の建築模型の撮影の様子

これらの成果を踏まえ、現在は約 20 分程度の山田 守建築紹介映像の完成を目指して編集作業を進めている。本映像は、まず湘南キャンパスと山田 守建築を紹介する構成とし、完成後は Web サイト等を通じて公開する予定である。さらに今後は、湘南キャンパス以外で撮影した山田 守建築の紹介や、建築のデザイン思想および細部表現、さらにはモダン建築をどのように次世代へ継承していくかという視点を加え、三部構成程度の長編ドキュメンタリーへと発展させる構想を持っている。リサーチの過程では、解体が予定されている山田 守建築が存在すること、また現存する建築の中にも将来的な保存の見通しが不透明なものがあることが明らかとなった。さらに、山田 守が 1920 年代にヨーロッパおよびアメリカを訪れ、当時のモダン建築や建築家と出会う中で自身が撮影した貴重なフィルムの存在も確認された。これらの事実は、単なる大学キャンパスの記録にとどまらず、日本のモダン建築の歴史を映像として残す意義を、本プロジェクト研究が再認識する契機となった。また本プロジェクト研究の概要は 2025 年 7 月にローマ大学サピエンツァ校工学部で開催された「国際都市デザイン会議」（主催：Genealogy of Urban Design Network、共催：ローマ大学サピエンツァ校工学部）での「コミュニティ大学キャンパスのためのパブリックスペース」をテーマにしたセッションで、工学部建築学科の教員とともに瀧が参加し報告と発表が行われた。

当初の目的であった、竣工から 60 年以上を経たキャンパス建築のデザイン的特徴を、若い感性を持つ学生がどのように探究し、再発見するかという試み、ならびに 4K 映像技術を用いたモダン建築の次世代への継承という点において、本プロジェクト研究はその第一段階に到達したと考えられる。今後も本プロジェクト研究を継続し、映像表現を通じた建築文化の記録と継承を進めていきたい。

本プロジェクト研究の Web サイト　https://yamadaprj.wixsite.com/mamoruyamadaarchitec/

[i] 藤岡洋保「山田守再考―合目的性に対応する新しい建築美をめざして―」『建築家山田守作品集』建築家山田守展実行委員会編、東海大学出版、2006 年、pp.2-17。

[ii] DOCOMOMO Japan 公式サイト　https://docomomojapan.com/　（2026 年 1 月 31 日現在）